

「不愉快な発話」に関する考察のために

瀬川 真由美

1. 問題提起

コミュニケーション上、聞き手に「不愉快な」感情を喚起してしまう、あるいはそのような印象を与えてしまう表現が存在する。「不愉快な」感情を喚起する、またはそのような印象を与える発話に、命題には聞き手を直接的にも間接的にも批判／非難／罵倒などする内容が含まれていないものがある。聞き手を直接的にも間接的にも批判／非難／罵倒などする内容を命題に含まないにも関わらず聞き手に「不愉快な」感情を喚起してしまう、あるいはそのような印象を与えてしまう発話では、その発話に関わる話者の態度が問題になると考えられる。表情／ジェスチャーなどに代表される非言語的要素は排除し、言語的に表現された要素を対象に、「不愉快な」感情を喚起する、あるいはそのような印象を聞き手に与える語用論的／意味論的／統語論的／形態論的要因を探求するために、その前段階として発話者の心的態度を表す機能を担うとされている語群について考察する。

2. 文法書における分類に関する記述

言語理論の多くは、その程度の差はあっても具体的なコミュニケーションの行為における実際の言語活動から導き出された抽象化されたものである。そして言語を、そのものの内在で機能する体系に還元してきた。ドイツ言語学にあっては語用論は、1970年ごろから、John AustinやJohn SearleのSpeech act theory¹（以下、「発話行為理論」と並記）を基礎として発展し、記述の対象は当該言語の標準語としている（von Polenz 2008：67-70）。文意味論では、Sprechakttheorie（「発話行為理論」）が形式論理学からPrädikat（「述語」）、Argumentstelle（「項」）、Quantifizierung（「量化」）、Verknüpfungsrelation（「結合関係」）という範疇を設定することを導き出した。これらにさらに語用論

的範疇であるReferenz/Bezug（「指示」）、Illokution/Sprecherhandlung（「発話内行為」）、Perlokution/Bewirkungsversuch（「発話媒介行為」）、Propositionale Einstellung/Sprechereinstellung²（「命題態度」）が加えられた（von Polenz 2008：71, 212）。実証的な言語の調査はSprechakttheorie（「発話行為理論」）を援用し、特にSprachhandlungsverben（「遂行動詞」）、Modalverben（「話法の助動詞」）、Modaladverbien（「話法の副詞」）、Abtönungspartikel（「心態詞」）、Interjektionen（「間投詞」）、Konjunktionen³（「接続詞」）などが研究された（von Polenz 2008：71）。

このような言語研究の状況の中で、談話において果たす機能に関わるparticles/Partikeln⁴（「不変化詞」）の研究がどちらかと言えば取り残された状態のままになっている。語用論的観点からの研究が後発であったことが理由であると考えられている。またparticles/Partikeln（「不変化詞」）の用法が多様であることも原因であると指摘されている。その中では、Modalpartikeln（「話法詞」）がドイツ語においてはもっとも研究が進んでいるparticles/Partikeln（「不変化詞」）であるが、残りの多くのparticles/Partikeln（「不変化詞」）には確立した概念すら現在のところは存在していない（Imo 2013：158）のが実情である。1970年代からこの分野の研究が行われているにも関わらず、ドイツ言語学で分析が進捗しにくいのは、他の多くの言語と比較してドイツ語にはparticles/Partikeln（「不変化詞」）がとても豊富にある（Helbig und Buscha 1996：477）ことが影響していると考えられている。

本章では上述の現状を踏まえ、まずparticles/Partikeln（「不変化詞」）の信頼できる文法書での記述を概観する。

¹ Speech act theory はドイツ語では Sprechakttheorie と訳される。

² Prädikat, Argumentstelle, Quantifizierung, Verknüpfungsrelation, Referenz/Bezug, Illokution/Sprecherhandlung, Perlokution/Bewirkungsversuch, Propositionale Einstellung/Sprechereinstellung は日本語に訳出することによって述語の解釈があいまいになるため、原語と日本語を並記した。

³ Modalverben, Modaladverbien, Abtönungspartikel, Interjektionen, Konjunktionen は日本語に訳出することによって術語の解釈があいまいになるため、原語と日本語を並記した。

⁴ particles/Partikeln は日本語の訳語として「不変化詞」が使用されることが多いが、他の用語と同様に原語と並記する。

2.1 Modalpartikeln (「話法詞」) と Abtönungspartikeln (「心態詞」) の分類の比較

Modalpartikeln (「話法詞」) と Abtönungspartikeln (「心態詞」) という用語の下に扱われている語群は文法書によって異なっている。品詞として Partikeln (「不変化詞」) をまず設定し、その後その機能によって2つのグループ、すなわち、コミュニケーション機能が優勢な語群と意味機能が優勢な語群に大別するか、あるいは、Partikeln (「不変化詞」) を最初から意味機能で細分化して語群を分類している。前者の分類方法を Helbig und Buscha (1996) が採用している。後者では、Grammatik der deutschen Sprache (1997: 58-59) が Modalpartikeln (「話法詞」) と Abtönungspartikeln (「心態詞」) を区別して扱っている。これらの2種類の文法書とは異なり、Duden Grammatik (2006: 597-598) では Abtönungspartikel (Modalpartikel) と並列して記述している。しかしどの立場にあっても、Partikeln (「不変化詞」) をできるだけ正確に記述するために、各文法書はそれぞれに統語的特徴により分類を試みている。

2.2 語としての分類と語順

2.2.1 Helbig und Buscha (1996)

Helbig und Buscha (1996: 477-479) では、Partikeln (「不変化詞」) を意味的機能あるいはコミュニケーション機能のどちらがその語において優勢であるかにより2つのグループに大別できることが述べられている。

- ・コミュニケーション機能が優勢である Partikeln (「不変化詞」)
 - aber, also, auch, bloß, denn, doch, eigentlich, einfach, etwa, gerade, halt, ja, mal, noch, nun, nur, schon, überhaupt, vielleicht, wohl
- ・意味的機能が優勢である Partikeln (「不変化詞」)
 - beinahe, bereits, etwas, ganz, höchst, immer, nahezu, recht, sehr, so, überaus, viel, weit, weitaus, zu

上記とは異なる観点で、Partikeln (「不変化詞」) の統語的下位区分として、共起し当該の語がかかってくる品詞を基準として6つのグループを提示している。

- ・名詞、動詞、形容詞、副詞に隣接してそれらにかかってくる部類
 - aber, auch, beinahe, bereits, bloß, eben, erst, etwa, gar, gerade, geradezu, halt, ja, nahezu, nicht einmal, noch, nur, schon, sogar
- ・名詞、形容詞、副詞に隣接してそれらにかかってくる部類
 - besonders, fast, ganz

- ・動詞、形容詞、副詞に隣接してそれらにかかってくる部類
 - doch, durchaus, immer, sehr, so, zu
- ・形容詞、副詞に隣接してそれらにかかってくる部類
 - etwas, höchst, recht, überaus, viel, weit, weitaus, ziemlich
- ・名詞、副詞に隣接してそれらにかかってくる部類
 - allein, beispielsweise, zumal
- ・動詞に隣接してそれらにかかってくる部類
 - also, den, mal, nicht, nun, überhaupt

2.2.2 Zifonun (1997)

Zifonun (1997: 58-59) では、Partikeln (「不変化詞」) の中で Modalpartikel (「話法詞」) と Abtönungspartikel (「心態詞」) を語用論的観点から区分している。

Modalpartikel (「話法詞」) と共起して、ある出来事が特定の叙法により発語内行為として判断されるあるいは評価されているのかが表現される。つまり Modalpartikel (「話法詞」) はある一定の発語内行為を特徴づけるのに寄与し得る。また Modalpartikel (「話法詞」) は決定疑問文の回答として応答の機能を持ち、あるいは他の応答の語と組み合わせられることもある。統語的には Modalpartikel (「話法詞」) は文副詞として機能し、動詞にかかってくるが、Modalpartikel (「話法詞」) は否定され得ないと説明している。語の例として以下が挙げられている。

- ・Modalpartikeln (「話法詞」)
 - bedauerlicherweise, sicherlich, vielleicht
 - ・Abtönungspartikeln (「心態詞」)
 - aber, bloß, denn, doch, eben, halt, ja, nur, vielleicht
- 上記の語をさらに文アクセントを担うか否かによって下位区分している。
- ・文アクセントを担わない語
 - etwa, vielleicht
 - ・文アクセントを担える語
 - bloß
 - ・文アクセントを担わなければならない語
 - ja

Abtönungspartikel (「心態詞」) は談話において典型的に出現する。統語的には前域に出現することはない。叙法と Abtönungspartikel (「心態詞」) には一定の結合関係がある。一つの文中に複数の Abtönungspartikeln (「心態詞」) が出現可能であるが、その語順には制限があるとも説明を加えている。

2.2.3 DUDEN Grammatik (2006)

DUDEN Grammatik (2006 : 597) では、Abtönungspartikeln (「心態詞」) は中域に出現し、たいていはレーマの前であると解説している。

2.3 Partikeln (「不変化詞」) が出現する文タイプ

2.3.1 Helbig und Buscha (1996)

Helbig und Buscha (1996 : 486-495) ではコミュニケーションに貢献する Partikeln (「不変化詞」) の出現について、2種類の要因が関与していると記述している。以下に設定された文タイプと話し手の意図を示す。

- ・ formaler Äußerungstyp (「形式的文タイプ」)
 - Aussagesatz (「陳述文」)
 - Entscheidungsfrage (「決定疑問文」)
 - Ergänzungsfrage (「補足疑問文」)
 - Aufforderungssatz (「要求文」)
- ・ Sprecherintention (「話者の意図」)
 - mit Aussageintention (「陳述」)
 - mit Ausrufeintention (「感嘆」)
 - mit Frageintention (「疑問」)
 - mit impliziter Antwort (「回答」)

上記を組み合わせると下記の8区分が作成されている。

- ・ Aussagesatz (「陳述文」)
 - mit Aussageintention (「陳述」)
 - mit Ausrufeintention (「感嘆」)
- ・ Entscheidungsfrage (「決定疑問文」)
 - mit Frageintention (「疑問」)
 - mit Ausrufeintention (「感嘆」)
- ・ Ergänzungsfrage (「補足疑問文」)
 - mit Frageintention (「疑問」)
 - mit Ausrufeintention (「感嘆」)
 - mit impliziter Antwort (「回答」)
- ・ Aufforderungssatz (「要求文」)
 - Aufforderung (「要求」)

上記の基準によって以下の語が分析の対象となっている (Helbig und Buscha 1996 : 487)。

- ・ 分析の対象となっている語

aber, auch, bloß, denn, doch, eben, eigentlich, etwa, halt, ja, mal, nur, schon, vielleicht, wohl

2.3.2 Zifonun (1997)

Zifonun (1997 : 614-616) も文タイプによって出現する Partikeln (「不変化詞」) を分類している。次のように文タイプを区分している。

- ・ Aussagesatztyp (「陳述文」)
- ・ Entscheidungsfragesatztyp (「決定疑問文」)
- ・ V-L-Formtyp des Entscheidungsfrage-Modus (「定形文末の決定疑問文」)
- ・ Ergänzungsfragesatztyp (「補足疑問文」)
- ・ V-L-Formtyp des Ergänzungsfrage-Modus (「定形文末の補足疑問文」)
- ・ Aufforderungssatztyp (「要求文」)
- ・ V-L-Formtyp des Aufforderungs-Modus (「定形文末の要求文」)
- ・ Formtyp des Heische-Modus (「強い要求文」)
- ・ Formtyp des Wunsch-Modus (「願望文」)
- ・ V-1 od. V-2-Formtyp des Exklamativ-Modus (「定形文頭あるいは定形第2位の感嘆文」)
- ・ V-L-Formtyp des Exklamativ-Modus (「定形文末の感嘆文」)

上記の基準によって以下の語が分析の対象となっている (Zifonun 1997 : 614-616)。

- ・ 分析の対象となっている語
 - aber, auch, bloß, denn, doch, eben, eigentlich, einfach, erst, etwa, gerade, halt, ja, mal, noch, nun, nur, ruhig, schon, vielleicht, wohl

本章では異なる分類基準を主張している信頼されている代表的な文法書における Partikel (「不変化詞」) の記述を概観した。

3. Partikeln (「不変化詞」) の機能についての文法書における記述

本章では Partikeln (「不変化詞」) がどのような機能を担っていると文法書が記述しているのかを概観する。

3.1 Helbig und Buscha (1996) における記述

Helbig und Buscha (1996 : 479-480) では Partikeln (「不変化詞」) の記述は統語論的意味論的記述だけでは十分とは言えないと断っている。その理由として Partikeln (「不変化詞」) がコミュニケーション上の語用論的機能を非常に多く担っていることをあげている。またこのような機能は言語一般に認められ、記号の体系と

しての言語は自己目的ではなく、コミュニケーション行為の手段であり、結果であり前提でもあると指摘している。したがって、言語には文法的慣習（音声と語義／統語と意味の秩序）だけではなく、言語記号の関係性から生じ全体でコミュニケーション機能を果たすコミュニケーション上の慣習もあると説明している。ある文を発話することで、意味伝達が完遂されるだけではなく、それに結びついて同時に発話行為が生じると指摘している。また、言語単位は様々なコミュニケーション機能を担っており、発話された文は単に文であるだけではなく、発話行為が生じる文脈に依存し、発話行為には、警告、質問、確認、要求、忠告、威嚇⁵が含まれると記述している。もちろん、単一の文として文脈から切り離しても一義的である、あるいは一義的に近い文は存在する。その発話行為がどのような意図をもって行われたのかを、より一義的にする役割を Partikeln（「不変化詞」）は担っているとしている。そして Partikeln（「不変化詞」）は、つねに発話された文を一義的にするとは限らないが、当該の発話行為が言語を表現手段とするインタラクションの与えられた条件の下でどのように機能しているのかを明確にする働きを持っていると説明している。発話者はこれを用いて発話の命題内容を修飾し、聞き手の解釈過程を操作し、それによりインタラクション⁶をコントロールできると記述している。

3.2 Zifonun (1997) における記述

Zifonun (1997 : 614) では、Abtönungspartikeln（「心態詞」）を用いて発話者は命題外でインタラクションの場で様々な期待、例えば、どのように、ある命題の情報、インタラクションパートナーの反応、あるいは発話された事柄の発話者とインタラクションパートナーが共に評価することが期待されているのか、を呼び覚ますのだと説明している。しかし個々の Partikeln（「不変化詞」）が持つ特殊な期待を表現する構造がオーバーラップしていることも認めている。また文タイプは形式的文タイプと別に機能による叙法を考慮した文タイプを設定すべきであると主張している。

- ・ Aussagesatztyp-Bedeutung（「陳述文タイプの意味」）
= Funktionstyp des Aussage-Modus（「陳述の叙法の機能タイプ」）
- ・ Entscheidungsfragesatztyp-Bedeutung（「決定疑問文タイプの意味」）
= Funktionstyp des Entscheidungsfrage-Modus
- ・ Aufforderungssatztyp-Bedeutung（「要求文タイプの

意味」）

- = Funktionstyp des Aufforderungs-Modus（「陳述の叙法の機能タイプ」）
- ・ Aussagesatztyp-Bedeutung + Bedeutung weiterer modusprägender Formmerkmale（「陳述文タイプの意味にさらに異なる叙法の形式的特徴を持つ文の意味」）
= Funktionstyp des Heische-Modus（「命令の叙法の機能タイプ」）
- ・ Entscheidungsfragesatztyp-Bedeutung + Bedeutung weiterer modusprägender Formmerkmale（「決定疑問文タイプの意味にさらに異なる叙法の形式的特徴を持つ文の意味」）
= Funktionstyp des Wunsch-Modus（「願望の叙法の機能タイプ」）
- ・ Aufforderungssatztyp-Bedeutung + Bedeutung weiterer modusprägender Formmerkmale（「要求文タイプの意味にさらに異なる叙法の形式的特徴を持つ文の意味」）
= Funktionstyp des Exklamativ-Modus（「感嘆の叙法の機能タイプ」）

文形式タイプ、形式タイプの意味、機能タイプの対応関係を明らかにすることにより、文形式が異なっている、その形式が担う文の意味をその機能によって把握することができる」と説明している（Zifonun 1997 : 616）。

3.3 DUDEN Grammatik (2006) における記述

DUDEN Grammatik (2006 : 597) では Abtönungspartikeln（「心態詞」）の表現する内容は、発話された出来事に関しての発話者の態度、推測、評価や期待、時には聞き手に対する期待も表すと記述している。しかし機能をはっきりと規定することはできないと結論めいて書かれている。

4. Partikeln（「不変化詞」）を含む文の意味

Partikeln（「不変化詞」）が一様には理解困難な語群であることは第3章の記述で見取れるが、その難解さは何に起因しているのだろうか。ある言語、特にドイツ語を共時的観点で分析する際には形式（統語的環境）と意味（文意味と語の意味）に一般的に注意がはらわれている。意味記述においては、多くの語に共通する範疇を求める方法⁷や語彙機能文法⁸も用いられる。しかし Partikeln（「不変化詞」）はそのような記述方法で

⁵ 原語では次の語で表されている。eine Warnung, eine Frage, eine Feststellung, eine Aufforderung, ein Ratschlag, eine Drohung がそれぞれの語である。

⁶ 原語の Interaktion をインタラクションと訳出した。

は捉えられにくい。文の形式が同一であっても、そこに Partikeln (「不変化詞」) が添加されることにより、その文が担う意味的機能が変化する。

本章では例文とともに Partikeln (「不変化詞」) を含む文の意味を検証する。

Partikeln (「不変化詞」) を含まない文を示し、その文に Partikeln (「不変化詞」) を添加することにより、どのように文の意味が変容し、その文が全体でどのような意味を担うようになるのかを例文を挙げて述べる。例文には逐語的に対応する英語を付し、日本語訳を加えた。Partikeln (「不変化詞」) には下線を付した。なお、Partikeln (「不変化詞」) には複数の可能性があるため英語訳を付さなかった。文の機能については日本語訳のみを付した。

Partikeln (「不変化詞」) を含まない例文を示す。

(1) Der Vortrag war interessant!

the lecture was interesting

講演は興味深かった。

例文 (1) に Partikeln (「不変化詞」) を添加すると次のように文の意味が変容する。

(2) Der Vortrag war aber interessant!

(DUDEN Grammatik (2006 : 598))

the lecture was interesting

講演はそれでも興味深かった。

例文 (2) には「講演はもっと面白くないと予想されていた」ことが含意されている。

Partikeln (「不変化詞」) を含まない例文を示す。

(3) Du kannst das Fenster schließen.

you can the window close

君は窓を閉められる。

例文 (3) に Partikeln (「不変化詞」) を添加すると次のように文の意味が変容する。

(4) Du kannst mal das Fenster schließen.

(Helbig und Buscha (1996 : 480))

you can the window close

ちょっと窓を閉めてもらえるかな。

例文 (4) には「弱い要求」が含意されている。

Partikeln (「不変化詞」) を含まない例文を示す。

(5) Ina isst kein Fleisch.

Ina eats no meat

イーナは肉料理を食べない。

例文 (5) に Partikeln (「不変化詞」) を添加すると次の

ように文の意味が変容する。

(6) Ina isst eben kein Fleisch. (Thurmair (2013 : 634))

Ina eats no meat

イーナは肉料理を食べないのだから。

例文 (6) には「料理を食べない理由が、それが肉料理であるから」という根拠が含意されている。

Partikeln (「不変化詞」) を含まない例文を示す。

(7) Du bist närrisch.

you are foolish

君はどうかしている。

例文 (7) に Partikeln (「不変化詞」) を添加すると次のように文の意味が変容する。

(8) Du bist schon närrisch.

(Zifonun 1997 : 906)

you are foolish

君はどうかしているのだよ。

例文 (8) では発話者は、聞き手と同じ社会的階層になるつもりはないことを理解させようとしている (Zifonun 1997 : 906)。

Partikeln (「不変化詞」) を含まない例文を示す。

(1) Der Vortrag war interessant!

the lecture was interesting

講演は興味深かった。

例文 (1) に Partikeln (「不変化詞」) を添加すると次のように文の意味が変容する。

(9) Der Vortrag war vielleicht interessant!

(DUDEN Grammatik (2006 : 598))

the lecture was interesting

講演は本当に興味深かった。

例文 (9) には「講演はもっと面白くないと予想されていた」ことが含意されている (DUDEN Grammatik 2006 : 598)。

Partikeln (「不変化詞」) を含まない例文を示す。

(3) Du kannst das Fenster schließen.

you can the window close

君は窓を閉められる。

例文 (3) に Partikeln (「不変化詞」) を添加すると次のように文の意味が変容する。

(1) Du kannst doch das Fenster schließen.

(Helbig und Buscha (1996 : 480))

you can the window close

窓を閉めていいですよ。

例文 (10) には発話者が「聞き手の希望に同意する」こ

⁷ 例えば CAUSE, BE, BECOME などを用いて記述する。

⁸ 原語は Lexical Functional Grammar

とが含意されている (Helbig und Buscha 1996 : 480)。

Partikeln (「不変化詞」) を含まない例文を示す。

- (1) Der Vortrag war interessant!
the lecture was interesting
講演は興味深かった。

例文 (1) に Partikeln (「不変化詞」) を添加すると次のように文の意味が変容する。

- (11) Der Vortrag war ja interessant!
(DUDEN Grammatik (2006 : 598))
the lecture was interesting
講演は興味深かったじゃないか。

例文 (11) には「退屈な講演が予想されていた」ことが含意されている (DUDEN Grammatik 2006 : 598)。

vielleicht の用いられている他の例文を挙げる。

- (12) Du bist vielleicht närrisch. (Zifonun 1997 : 906)
you are foolish
君は本当にどうかしている。

例文 (12) では発話者は自分が傍観者の立場であることを表明し、聞き手を擁護するつもりも、聞き手が優れているとも思っていないことを表している (Zifonun 1997 : 906)。

doch の用いられている他の例文を挙げる。

- (13) Ina isst doch kein Fleisch. (Thurmair (2013 : 634))
na eats no meat
イーナはそれでも肉料理は食べないよ。

例文 (13) では、「他に料理の選択肢がなかったとしても」という前提が含意される (Thurmair 2013 : 634)。

- (14) Du bist doch närrisch. (Zifonun 1997 : 906)
you are foolish
君はやっぱりどうかしている。

例文 (14) では、発話者は様子をしばらく見ており、時間的経過があり、徐々にこのような見解に至ったことを聞き手に伝えている (Zifonun 1997 : 906)。

ja の用いられている他の例文を挙げる。

- (15) Du kannst ja das Fenster schließen.
(Helbig und Buscha (1996 : 480))
you can the window close
窓を閉めたらどうだ。

例文 (15) には「忠告」が含意されている (Helbig und Buscha 1996 : 480)。

- (16) Ina isst ja kein Fleisch. (Thurmair (2013 : 634))
Ina eats no meat
イーナはだから肉料理は食べないの。

例文 (16) には「料理の他の選択肢があるため」という根拠が含意されている (Thurmair 2013 : 634)。

- (17) Du bist ja närrisch. (Zifonun 1997 : 906)
you are foolish
君ってどうかしている。

例文 (17) によって、聞き手は、自分の行いが発話者を急に不安がらせたことを知ることができる (Zifonun 1997 : 906)。

以上、Partikeln (「不変化詞」) を添加することにより、Partikeln (「不変化詞」) を含まない文の意味に変容が生じること、また、その文の意味的機能が聞き手に対してどのように作用するようになるのかを、先行研究により確認した。しかし、かなり漠然とした捉え方に終始していることが見て取れる。

次章では Partikeln (「不変化詞」) と「不愉快な発話」との関連について考察し、今後の展望を述べる。

5. 「不愉快な発話」の解明へ向けて

前章まで Partikeln (「不変化詞」) がその用語においても、研究者や文法書によって異なっていること、また、その機能が漠然としか把握されていないことを述べた。

本章では、Partikeln (「不変化詞」) と「不愉快な発話」との関連について考察を加える。例文には逐語的に対応する英語を付し、日本語訳を加えた。Partikeln (「不変化詞」) には下線を付した。なお、Partikeln (「不変化詞」) には複数の可能性があるため英語訳を付さなかった。

Partikeln (「不変化詞」) を含まない例文を示す。

- (18) Er ist krank.
he is sick
彼は病気だ。

例文 (18) に Partikeln (「不変化詞」) を添加することにより以下の例文が得られる。

- (19) Er ist vielleicht krank.
he is sick
彼は病気だと思う。

- (20) Er ist doch krank.
he is sick
彼はそう病気だよ。

- (21) Er ist ja krank.
he is sick
彼は病気なんだね。

そもそもある文タイプが必ずしもコミュニケーション機能においてその文タイプの本来的に持っている意味を担っているとは限らないという主張があったとしても (Helbig und Buscha 1996 : 480)、これらの例

文 (18) ~ (21) の意味的差異は、Partikeln (「不変化詞」) の添加によって生じており、個々の語彙が影響していると考えられる。このような現象を DUDEN Grammatik (2006) では、Abtönungspartikeln (「心態詞」) の意味は、発話内容に対するコメントとして表現されていると説明している。Thurmair (2013: 630) は Modalpartikeln (「話法詞」) の本質的な特徴は複合的機能を持つことにあると記述し、発話者の発話に対する態度を示し、そのため命題についての真偽については関わらないと説明している。発話をその談話中の文脈、あるいは状況に入れ込む機能があるため、発話者は Modalpartikeln (「話法詞」) を使用することによって具体的に共通の知識を喚起する、期待や推論を暗示する、発話された内容を強化するあるいは弱化することができるとしている。個々の語彙による影響については、Thurmair (2013: 634) は共通の認識と発話を談話で結びつける役割を Partikeln (「不変化詞」) が担い、その結びつけ方に違いがあると説明している。

また、Modalpartikeln (「話法詞」) の有無による文の意味の違いは、発話者の態度が示されているのか否かと文脈にどのように関連づけているのかであると述べている (Thurmair 2013: 635)。ドイツ語には、命題の内容とは関わりがなく、発話者が発話内容にどのように関わっているのかを聞き手に示す役割を担っている接続法と話法の助動詞がある。Partikeln (「不変化詞」) との共起性について例文 (22) ~ (27) を挙げる。例文には逐語的に対応する英語を付し、日本語訳を加えた。Partikeln (「不変化詞」) には下線を付した。なお、Partikeln (「不変化詞」) には複数の可能性があるため英語訳を付さなかった。

(22) ??Er kann^{Ind.} vielleicht krank sein.

he can sick be

(23) Er könnte^{Konj.II} vielleicht krank sein.

he could sick be

(24) Er kann^{Ind.} doch krank sein.

he can sick be

(25) Er könnte^{Konj.II} doch krank sein.

he could sick be

(26) ?Er kann^{Ind.} ja krank sein.

he can sick be

(27) Er könnte^{Konj.II} ja krank sein.

he could sick be

例文 (22) の容認度の低さは、「話法の助動詞」können と vielleicht の「証拠性」の程度の齟齬によるものと考えられる。例文 (26) は文法的には容認されるが、聞き

手にとって「不愉快」な感情を喚起する可能性がある。例文 (27) は接続法 II 式を用いているため発話者の確信度が例文 (26) よりも低いと考えられる。例文 (26) の聞き手にとっての「ある種の違和感」あるいは「不愉快」な感情を喚起する要因として Partikel (「不変化詞」) としての ja との共起が可能性としてある。

Imo (2013: 156-268) は電話での会話を採録し ja を取り上げ、その多機能性を論じている。Partikeln (「不変化詞」) の中でも典型的な Abtönungspartikel (「心態詞」) とされている単独で使用された ja の担う機能は以下のようにまとめられ得る。

- ・相手が発話内容の出来事を知っているものとして、相手に発話を投げかける機能
- ・疑問、推測の確認、提案の受け入れなどを示す肯定的回答を示す機能
- ・相手に、聴いているのでさらに話を続けてもよいという信号を送る機能
- ・発話をなぞる、新しい話題で話を開始する、それまでの話題を引き受けて話をする準備があることを示す機能
- ・単独の発話、継続していた一連の話題、発話行為などが終了したことを示す機能
- ・談話中に注意を喚起する、発言の権利を明け渡す機能

これらの機能を ja は担っていると分析している。また、Zifonun (1997) は Abtönung (「微妙なニュアンスを加えること」) は瞬時の感情的な関わりのマーカーとして解釈され得ると述べている。口頭での自然に生ずる発話においては、Abtönungen (「微妙なニュアンスを加えること」) は熟考してから使用されるものではないということを前提としている。書き言葉において推測され得るのは、自然に生じた特徴ではないということだとも説明している (Zifonun 1997: 904)。Abtönungen (「微妙なニュアンスを加えること」) が影響を与えるのは、「何が陳述の内容か」にではなく「陳述がどのように」当該の文脈の中に組み込まれているのかに作用していると述べている (Zifonun 1997: 905)。

例文 (26) が聞き手にとって違和感を持って受け取られる要因は、Abtönungspartikeln (「心態詞」)、接続法、話法の助動詞、の作用の 3 つの要素が何らかの齟齬を生じさせるためであると考えられる。今後は、どのような構成を持つ文が、どのような発話者と発話内容の関係性を示すのか、発話者が談話の中に自らの発話をどのような意図をもって入れ込むときに聞き手が「不愉快」な感情とともにその発話を受け取ってしまうのか、そのメカニズムを解明することを目標とする。

参考文献

- Austin, John Langshaw (1962). *How to do Things with Words*. Cambridge, MA : Harvard University Press.
- Duden (2006). *Die Grammatik*, 7. Auflage. Mannheim: Dudenverlag.
- Eroms, Hans-Werner, Gerhard Stickel und Gisela Zifonun (Hrsg.) (1997). *Grammatik der deutschen Sprache*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Helbig, Gerhard und Joachim Buscha (1996). *Deutsche Grammatik*. Leipzig/Berlin/München/Wien/Zürich/New York: Langenscheidt.
- Imo, Wolfgang (2013). *Sprache in Interaktion*. Berlin/Boston: de Gruyter.
- Musan, Renate (2009). *Satzgliedanalyse*. Heidelberg: Universitätsverlag Winter.
- Searle, John Rogers (1976). The Classification of Illocutionary Acts. In *Language in Society* 5, 1-24.
- Sudhoff, Stefan (2010). *Focus Particles in German*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Thurmair, Maria (2013). Satztyp und Modalpartikeln. In *Satztypen des Deutschen*. Berlin/Boston: de Gruyter, 627-651.
- von Polenz, Peter (2008). *Deutsche Satzsemantik*. Berlin/Boston: de Gruyter.